平成 18 年度通常総会会長挨拶

正 責 内 藤 林*

本日は、通常総会に多数ご参加頂きまして心よりお礼申し上げます。
昨年三学協会が統合して新しい学会が設立されてから、一年になります。その間、理事会が中心になり過去の優れた遺産を引き継ぎながら、新学会がスムーズに立ち上げるために誠意努力してきました。その結果として、新学会が基本的には離陸したのではないかと思っております。その離陸した飛行機は、非常に大きな期待を背負った形で離陸しております。それがまた、これが更に大きく空に舞い上がるためには、総会にご参加頂きました皆様を始め会員諸氏のご支援が必要となりますので、まず、一層のご支援をお願い申し上げております。

1. 離陸に成功した新しい学会

学会活動にとって重要なことがいくつかあるが、第一番目は、学会論文集・学会の雑誌の発行です。今まで、三学協会が別々に発行してきました論文集が統一され、新しい論文集としてすでに 2 号が発行されてきました。2 ヶ月毎に発行される KANRIN も、すでに 6 号を数えるに至っています。KANRIN は、ご承知のように三支部が回り持ちで発行しており、各々の支部のやり方が少しずつ違っているが、統一された形で発行されています。内容は今までよりも一層豊かになり、皆様のご要望に積極的に答えられる雑誌になってきているのではないかと思っております。

第二番目に、学会として重要な研究会活動のことです。研究会活動は、少し出足が遅れておりましたが、関係各位のご努力で従来の研究活動、クラス、新しく研究課題を明確にしその課題を解決する委員会、いわゆるプロジェクト委員会とか、あるいは、今後の日本の船舶工学、海洋工学のあり方等々を考える、戦略的事を議論する委員会等も新しく立ち上がり、積極的な会員の方々がその活動に参加しております。これらは、全く新しい研究委員会活動として発展しているところであります。さらに三支部体制になって、各支部で各種の研究会とか勉強会が行われるようになってきております。

旧来の関西地区で行われてきた流体力学研究会のようなものが西部地区でも行われるようにになってきておりますし、東部地区では将来の船舶海洋工学の方向性等について高い立場からも議論が行われる委員会も新しく生まれてきています。このような従来にもまして学会活動に色々な立場から参加してくる人々が増えてきていると思っております。

国際的な活動に目を転じてみると、日本の船舶海洋工学学会は国際的にリーディング・サウザナーとしての役割を担っているが、特にヨーロッパ・アジア・アメリカの三地区との連携が重要になっています。この新学会立ち上がりの時期には、特に英国の学会との連携を一層深めてきましたし、アジアでは、日本・韓国・中国・インドネシア・ベトナム・台湾等々の造船関連学会との連携を深め、アジア造船関連学会協議会（PAAMES）を一層発展させるために努力し、その交流を深めてきました。学会が国際交流をなぜ重要かと言いますと、科学技術が本来有している国際性に由来し、新しい種々の意見交流・人的交流が、技術の発展に不可欠であるからです。このような意味で新学会が積極的に国際関係を創り出してゆくという立場で見ると、一段と豊かになったのではないかと思っております。学会が育ててきた JMS（Journal of Science and Technology）も、国際的権威が立ち上がり国際的に確立した論文集となっております。また、様々な国際レベルの各種シンポジウム、各種大型コンファレンスで、会員の方々が重要な指導的役割を果たしている例が非常に多くなってきています。このようなわずか一年の間でありましたけれども、皆さんのご活躍の成果として新学会が順調に出港できました。学会は会員の皆様が活躍できるプラットホームを構築することを一つの大きな目的にしておりますが、そのほんの一部を達成できつつあると考えています。

特にこの間の特筆すべきことの一つとして、今まで船舶海洋工学分野に蓄えてきた技術の集積をそのまま継承していることで、過去に沢山開かれてきたシンポジウムテキストが、今回一枚の CD（価格：会
2. 二年目の飛躍のために

さて、早くと離陸した飛行機ですが、これからの一年、どのような方向へ発展してゆくか考えてみたいと思います。一つは、船舶関連の多くの人々との連携を一層強めたいと考えております。既にマリンエンジニアリング学会、日本航海学会の会長と申しますが、近々三学会合議を聞く予定にしております。ここでは、船舶を核として、三学会各々の立場から、今後の新しい船舶工学のあり方、技術の方向性について議論して、三学会が共同した形で、海事、船舶の役割、技術の発展の方向等について共通した認識を有するよう努力する予定です。当面の活動の一つの集約点として、今年度中に三学会がシンポジウムの開催を考えています。

また、日本船舶技術研究協会あるいは日本船用協会、日本海事協会、国土交通省海上技術安全局、海上技術安全研究所等々との連携を深めるべく、すでに指導者の方々とは個別に意見交換をしております。今年度中に、船舶を核とした海事クラスターを形成して、常に船舶海洋関連技術を中心にした意見交換、議論が行われる組織を形成したいと考えています。さらに、日本は海に囲まれた海洋工学分野の多くの人々との連携を一層広めて海洋工学の発展の方向に触媒的役割を果たすよう努力したいと思っております。すなわち、船舶工学を核にして多くの技術者を吸収しながら、海洋工学という広い工学分野で、多様な人々との連携を深めてゆくという基本的な本学会の目的に沿った活動を着実に広めてゆきたいと思っております。

3. 一つのお願い

わが日本船舶海洋工学会の会員は、若い人も多いのですが、それは、年齢が高いシニアの方も多くおられます。シニアの方々には、日本船舶海洋工学会の一部を吸収し、そのシステムも考慮して、老中青年が結び合った会員の希望に寄り添う新学会活動を構築すべく、今年一年努力してゆきたいと思っております。

通常総会が東京でなく、関西で開かれるのは久しぶりではないかと思います。この順番で行きますが、来年は西部地区で開催される予定です(★)。このように、東部・関西・中部と通常総会が回り持ちになります。日本船舶海洋工学会が、三支部の諸活動の上に立ち、由縁のある学会として品位を保ち多くの人々に好かれる学会として一層発展させてゆきたいと考えています。当学会の先輩の方々、中堅の一線の方々、若い人々が一層、わが学会に結集して楽しく活躍して頂くよう心からお願いして簡単ですが、会長の挨拶とさせて頂きます。ありがとうございました。

★この挨拶の後開催された定例理事会（6月16日）で、年次総会（今までは春に開催されてきた）と三支部合同講演会（今までは秋に開催されてきた）を春に同時開催することが決まりました。年次総会は春に開催する必要があります、来年は東部支部が合同講演会担当などで、年次総会と合同講演会を東部地区で春（5月中旬頃）に同時に開催することが決まりました。ですから、西部地区での開催は再来年ということになりました。